

私たちの広場



特集 中央研修会

No.287

もくじ

名言の舞台	3
特集 中央研修会	4
研修会の概要	4
若者による若者への啓発活動	
基調報告	5
パネルディスカッション	6
市町村合併と明推協	
パネルディスカッション	11
アメリカの有権者教育レポート<第5回>	17
施策紹介	
三位一体の改革	20
マンガ 明るい選挙のあゆみ<第5回>	22
東西南北	25
協会からのお知らせ	27

表紙の紹介

標語に「心」とかかれているように、心が伝わってくるポスターです。人物一人一人の表情が優しく、自分の願いを込めて投票していることがしっかりと表現されています。背景の下の部分にデザイン化した人物を黄色で並べることにより、画面全体に変化が生まれ、美しいポスターに仕上がっています。

(審査評)
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

村上 尚徳

(選挙 平成一八年一月号より転載)

裏表紙の紹介

三月に実施した交通広告及び雑誌広告のデザインです。

明るい選挙啓発ポスター
平成17年度
文部科学大臣・総務大臣賞作品



加藤 千明さん

愛知県知立市立竜北中学校2年(受賞時)

議会は討論の大舞台、 民衆教育と政治論議の 大機関

ウォルター・バジョット

1826年生、1877年没

名言の舞台

ウォルター・バジョットは、アメリカ大統領リンカーンと同時代に活躍したイギリスの政治・経済学者です。一八六七年に刊行した「イギリス政治構造論」では、七カ所でリンカーンを引き合いにして英米の政治制度を比較しています。

その著作の中で述べているのがこの名言です。

議会は、「討論の大舞台、民衆教育と政治論議の大機関」であり、「卓越した政治家による議会での演説」が、「国民を刺激し、活気づけ、教育するのに、今まで知られていない手段の中で最上のもの」と説きました。

一八六七年、イギリスでは下院の選挙権が拡大されて有権者数がそれまでの二倍になり、デモクラシーが進展しました。しかし、バジョットは「庶民院は、望ましい程度に、言い換えれば国民一般が学びたいと欲している程度に、国民一般に教えるということをしていない」と、その市民教育機能への不満足な取り組みを批判しました。

さらに、「私は、きわめて抽象的で、哲学的で、難しいことを議会で述べてほしいと欲しているのではない。議会でなされる教育は、一般向けでなければならない、一般向けであるためには、それは、実際的で具体的に簡潔でなければならない」と続けています。

アメリカ第二八代大統領のウッドロー・ウィルソン（一八五六—一九二四）は、議会の機能についてバジョットの言にならって次のように述べています。「立法よりさらにいっそう重要なのは、国のすべての重大関心事を白日の下の論議の中に常にさらし続ける議会から、国民が受け取る、政治の問題に關しての教育とガイダンスである」

デモクラシーが大衆化し、大規模化した今日、政治の大舞台から発信する政治家の言葉の意義はますます大きくなっていると言えるでしょう。



特集

中央研修会

明るい選挙推進協会は、平成一八年三月六日、七日、東京都千代田区で平成一七年度中央研修会を開催しました。公職選挙法改正案を中心とした選挙制度の動向や昨年の衆院選をテーマにした講演が行われたほか、「若者による若者への啓発活動」「市町村合併と明推協」というホットなテーマでパネルディスカッションが行われ、会場も交えた熱心な討議が繰り広げられました。

研修会の概要

一日目の三月六日は、総務省の久保信保選挙部長が「最近の選挙制度をめぐる諸情勢等について」をテーマに講演しました。久保部長は、衆議院・参議院の比例代表選挙で実施されている在外選挙制度を改正し、小選挙区選挙及び選挙区選挙も対象とすること、法令上不明確である選挙人名簿抄本の閲覧制度を改正し、閲覧させる場合を明確化するとともに、閲覧手続等を整備すること、などを柱にした公職選挙法の一部を改正する法律案を概説。また、平成一七年の国勢調査の結果、議員一人当たりの人口格差が拡大しており、市町村合併に伴い二以上の小選挙区にわたる市町が六〇に達しているものの、今年二月の衆議院議員選挙区画定審議会では「著しい不均衡等が生じているとは認められない」との



認識から、選挙区の改定案の勧告を行わない結論になったことを紹介しました。さらには、ホームページによる選挙運動や電子投票など、IT時代における今後の選挙の方向性についても言及しました。

次に、「若者による若者への啓発活動」のテーマで、明るい選挙名古屋市推進協議会の小野耕二会長が名古屋市青年選挙ボランティアの取り組みの紹介を中心に基調報告を行いました（五頁参照）。

それを受け、沖縄県明るい選挙推進協議会の鳥袋純会長の司会で、明推協の青年組織などで選挙啓発活動に取り組んでいる福井県、愛知県、高知県及び静岡県藤枝市の四人の若者によるパネルディスカッションが行われ、若者の選挙への関心を高める啓発のあり方などについて、会場の意見も交えながら考えて

いきました（六頁参照）。

二日目の三月七日は、東京大学法学部の蒲島郁夫教授が「第四四回衆院選と日本の政治」をテーマに講演しました。蒲島教授は、昨年の衆院選について、「自民党が圧勝した選挙結果を分析すると、都市部での自民党の支持が高まるなど支持構造に大きな変化があった」としながらも、「得票率からすると、自民党は思っているほど勝っていないことも分かります」と指摘。その上で、「公明党の支持がなければ大量当選はあり得なかったし、共産党が全選挙区で候補者を立てなかったことで民主党の得票が伸びたことから、二大政党制というより、"二+二政党制" になりつつあります。また、二〇〇五年体制といった構造的な変化ではなく、一時的な変化であると考えています」と話し、「ただ、小泉政権は党首効果や政策決定のトップダウン、争点の単純化に、勝利の方程式があることに気づいたことは確かです。政党政治がどのように変化するかを考えることも、一票の重みを考える上で重要だろうと思います」との認識を示すなど、今後の政治や選挙の行方を考えていく上で極めて示唆に富んだ話がありました。

続いて、「市町村合併と明推協」をテーマにパネルディスカッションが行われました。秋田県、さいたま市、鳥取市、鹿児島県の選管や明推協会長から、各地の市町村合併に伴う明推協の統合・再編の動きや問題点などが報告されました（一一頁参照）。



〈基調報告〉

若者による若者への啓発活動

明るい選挙名古屋市政推進協議会会長
名古屋大学法学部教授 小野 耕二

合理的な人は投票するのか？

「合理的な人は投票するのか？」 この挑発的な問いかけに対し、皆さんはどのように答えるでしょうか。

人が投票する理由としては、「自分の望む人が当選するように望むから」というのが考えられますが、これは「合理的」な答えとはいえません。なぜなら、その人の一票で選挙結果が左右される可能性は限りなく低いからです。とすれば、時間と労力をかけてまで投票することに合理性はないわけです。

このように考えると、「投票しないほうが合理的なのに、なぜ人々は投票に行くのか」という疑問が生じます。これに対する私の答えは、「民主主義体制下の市民にとって、投票することにはそれ自体価値がある」というものです。その価値とは、「民主主義の維持のために」という理念的なものでもあり得るし、また、「投票によって、帰属する社会への一体感、つまり、地域社会の一員としての体験をする」という



小野さん

ことでもあり得ます。ですから、投票に行くことを「当たり前」と前提するので

はなく、投票に行くことに価値が感じられる人をいかに育てていくかが、私たちに問われているのです。では、そのためにどうすればいいのでしょうか。

「名古屋青年選挙ボランティア」の活動

「名古屋青年選挙ボランティア」は、名古屋市在住の若者を対象に公募し、平成一〇年から活動を開始しました。

メインの活動は、毎年一月に実施している選挙をテーマにした市民向けイベント「選挙フェスタ」の企画運営です。ボランティアを募集して活動していく際のポイントとなるのは、どのような活動を展開していけば達成感、満足感を味わってもらえるかです。そこで、名古屋市なりに工夫したのが、イベントを任せるということでした。

若者たちは話し合いを重ね、どのような内容にすれば市民に興味をもってもらえるかを真剣に考え、実行していきます。そして、イベントの企画運営を通して、「選挙のことが良く理解できた」「友だちが増えた」「年齢や性別に関係なく意見が言い合えたことがよかった」などと実感し、「ぜひ来年もやりたい」「新しい仲間を呼びたい」という思いをもつようになつて輪を広げているのです。

参加者は毎年三〇名ほどですが、活動を通じて達成感を得た若者を毎年恒常的に地元へ送り出していくことには、それなりの意義があると私は感じています。

エネルギーを引き出すことがカギ

若者のエネルギーを引き出せば、このような活動に協力する若者は全国各地にいると思います。若者に活動を任せることに不安を感じる人がいるかもしれませんが、しかし、今求められていることは、失敗を恐れず、若者を育てていく姿勢なのではないでしょうか。

また、若者に任せることで新しい感性を知り、組織や活動を活性化させる弾みにもなります。若者の感性を受けとめた上で、どうやってパワーを引き出していかかを考えていく時期にきています。大切なことは、若者にいかに達成感を体験させるかなのです。

ひとつの例ですが、多くの若者はサッカー場に足を運び、サポーターとしてひいきのチームに声援を送ります。しかし、応援したからといって、結果が変わるとは限りません。応援することは、「合理的」な行為とはいえないわけです。では、なぜ応援するのでしょうか。試合をしている好きなチームを応援し、一体となることに喜びがあり、そこに価値を見出しているからにはなりません。

翻って、私たちは政治や選挙において、そのような若者の熱気を引き出せているのでしょうか。目指すべきは、国の将来を決める選挙の場で、若者のみならず、国民のエネルギーを引き出すことなのです。政治に関心をもち、政治に関わり、公的決定に関与することに喜びを見出す人々をつくり上げていくことが、今求められているといえましょう。

若者による若者への啓発活動

＊パネリスト

忠村 尚美（藤枝市明るい選挙推進協議会委員、静岡産業大学学生）

中島 敦史（明るい選挙推進青年活動隊CEPT隊員、福井大学学生）

武田 恵美（明るい選挙推進サポーター、名古屋音楽大学大学院生）

上原 麗（高知県明るい選挙推進協議会委員、高知女子大学学生）

＊コーディネーター

島袋 純（沖縄県明るい選挙推進協議会会長、琉球大学教育学部政治学助教授）

参加のきっかけと活動内容

島袋 選挙啓発に向けた青年組織の活動が全国で始まっています。本日は、その活動に参加している青年ボランティアに話を聞きたいと思います。まずは、活動に参加したきっかけと活動内容をお話してください。

忠村 私が藤枝市明るい選挙推進協議会委員に参加したのは、大学の学部長から勧められ、興味をもったからです。

活動としては、昨年七月に県知事選の啓発活動を行い、うちわとウェットティッシュを配りました。また、九月の衆院選では期日前



忠村さん

をチェックしました。

今年一月には明るい選挙推進協会主催の青年リーダー養成研修（関東甲信越静岡ブロック）に参加しました。この研修では選挙啓発のラジオ番組のシナリオづくりに取り組み、プレインストーミングで若者の選挙や政治に対する意識上の問題点や解決策を考えました。さまざまな意見が飛び出し、有意義な議論ができたと思います。

中島 私は、福井県の明るい選挙推進青年活動隊CEPTで活動しています。その前は福井県明るい選挙青年推進員を務めていました。青年推進員になったのは、大学の政治学ゼミの先生から勧められたのがきっかけでした。青年推進員として青年リーダー養成研修（東海北陸ブロック）などに出席し、選挙について勉強しましたが、決められた活動に参加するだけで少し物足りなさも感じていました。そのような中、昨年春に県選管から青年活動隊立ち上げの話聞き、応募したのが参加の経緯です。

CEPTとは、「クリーン・エレクトション・プロモーション・チーム」の略で、「明るくきれいな選挙を推進するチーム」という意味です。二〇代の九人の隊員で昨夏から活動を開



中島さん

微です。

活動開始直後に衆議院が解散したため、衆院選の臨時啓発が初仕事になりました。街頭キャンペーンやテレビ・ラジオの啓発番組などで若者を中心に投票を呼びかけました。総選挙後は月一回の企画会議で活動についての話し合いを進めています。一月の「明るい選挙推進県民のつどい」ではアトラクションの企画運営を任せられ、クイズを行いました。CEPTのホームページも開設しているのでご覧いただければと思います。

武田 私は、愛知県の明るい選挙推進サポーターとして活動しています。この組織は今年度から活動を開始しました。成人式の代表を務めたこともあって市選管から誘われて愛知県の青年研修「ヤングフォーラムあいち」に参加し、その後、明るい選挙推進サポーターを立ち上げるので活動してもらえないかと声をかけられたのが参加のきっかけです。

現在一五人が登録しており、県選管が行う若者向け啓発事業をお手伝いする形で活動しています。リーダーはおらず、また、自分たちで事業を企画するわけではないので、そのぶん負担にならず、自分のペースで活動できるのがいい点です。



武田さん

私たちもティッシュ配りなどの啓発活動を行うとともに、月一回のペースで選挙職員と会議を行っています。職員の方々は二〇代後半から三〇代半ばで世代も近く、とても和やかな雰囲気です。話し合いが進められています。

今年度の大きな活動としては、「ワークシヨップ二〇〇五」と「選挙出前トーク」に取り組みました。「ワークシヨップ」は、毎年開催していた「ヤングフォーラム」を改題したものです。これまで一般公募や推薦で集まった若者が若者向け啓発ホームページの作成に取り組んできましたが、ホームページづくり自体目新しいものではなく参加者が減っていました。そこで、選挙が試験的に受け入れた学生インターシップとサポーターで取り組み内容を見直しました。その結果、より速効性のある啓発物を作成することになり、「選挙トラの巻」を作成しました。選挙権を得て初めての選挙のときに投票所で戸惑わないよう、投票所内を写真で紹介するとともに、投票の簡単さを伝える四コマ漫画なども掲載しています。仕上がりが楽しみです。

「選挙出前トーク」も今年度から始まった事業です。選挙職員とサポーターが小学校、中学校、高校へ出向き、選挙について紹介する企画です。県教育委員会から推薦していた

いた三校と募集に応じた学校から選んだ一六校で、一〇月から今年二月下旬まで実施しました。内容は、選挙の簡単な解説をして模擬投票を行い、最後に質問を受けます。時間があれば、啓発ビデオを流したり、クイズも行いました。出前トークで感じたことは、選挙の大切さを伝えるのであれば、的を絞ったほうが良いということです。多くの内容を話しても忘れられてしまうし、選挙は難しいというイメージをもたれる恐れがあるからです。また、小、中、高校生の理解のレベルに合わせて、内容とともに話し方も工夫していかなければならないことを学びました。小学生はとても素直ですが、中学、高校と進むにつれ反応が厳しくなっていくことを肌で感じました。

上原 私は、高知県明るい選挙推進協議会で委員を務めています。委員になったのは、平成一五年に私が通う大学で行われた「将来の有権者育成事業」がきっかけでした。「選挙にいく義務があるか」をテーマにパネルディスカッションを行い、私は「選挙に行くべき派」としてスピーチしました。その場に県明推協の植田会長が出席されていて、委員の誘いを受けたのです。まだ選挙の経験がなく、委員が務まるのか不安でしたが、折角いただいた機会だったので選挙について勉強してみようという軽い気持ちで入りました。友人の田端さんも誘い、現在二人で務めています。活動としては、昨年夏の衆院選の啓発活動



上原さん

や青年リーダー養成研修（中国・四国ブロック）への参加のほか、七月に「選挙ってどう思う？」と題した座談会を開催しました。植田会長のブツシユもあり、自分たちで行える取り組みとして企画したものです。ロコミで学生を集め、最も身近な場である大学内で実施しました。大げさにするとみんな引いてしまうし、出てくる意見も当たり障りのないものになってしまうので、顔見知りの学生同士で本音を語り合うという趣旨で小さな会合を開きました。

当日は、私も含め九人の学生が集まりました。県選挙職員にも出席いただき、選挙の仕事なども教えてもらいながら選挙や政治についての意見を出し合いました。「公約が分かりづらい」「投じた一票がどこまで反映されるか疑問」などさまざまな意見が出て、政治や選挙に対する日頃の思いを熱く語ってくれた学生もいました。さまざまな考え方があることを改めて知ることができました。

島袋 ありがとうございます。ここで会場の若い人にも話を聞きたいと思います。鳥根県でも青年ボランティアを組織化するそうですが、参加予定の岸本馨さん、参加のきっかけをお話してください。

岸本 大学一年ですが、ゼミの先生から参加を促されたのがきっかけです。選挙職員からもフレッシュなアイデアが欲しいといわれま



岸本さん

した。お役に立てる
か分かりませんが、
軽いノリで参加する
ことにしました。

島袋 皆さんのお話

から、選挙啓発活動に参加するきっかけとして大学が重要な力ギを握っていることが分かりました。キーパーソンになる大学の先生に協力を仰ぎ、そのゼミ生に参加してもらう方法が考えられます。また、学生が参加しやすい雰囲気づくりが重要だということですね。大上段に構えてしまうと学生は逃げてしまつので、そのあたりの配慮が必要だと感じました。

活動を続けたいと思った誘因

島袋 次に、いかに活動を継続させるかが重要な課題になります。自らを振り返り、どのようなときに活動を続けてもいいと思うようになったか、その誘因についてお話しいただきたいと思います。

忠村 軽い気持ちで参加したのですが、活動に参加して感謝されたり、自分のようなものでも必要とされていることが感じられると嬉しくなり、ついつい続けているということがあるのではないかと思います。また、選挙についていろいろな知識が得られることも大きな刺激となっています。参加していてももしろいことが、続けている最大の理由ではないかなと思います。

武田 サポーターに参加して、新しい仲間ができたことが大きいと思います。また、話し合った意見などを選管職員が受けとめ、きちんと次の会議や事業の企画に反映してくれることも、やりがいにつながっています。

出前トークで子どもに伝えていく喜びもあります。出前トークの原稿は選管で作成していますが、選挙の大切さをどう伝えていけばいいのかを考えていくうちに、自分なりに原稿をつくるようになってきました。活動を高めていきたいという気持ちも少しずつ大きくなっていきます。そういう形での参加だから続けられるのだと思います。

中島 個人的には、政治や選挙に興味があり、好きだったのでCEPTに参加したわけですが、活動していて最も嬉しいのは、周りの人たちから反応があったときです。

また、隊員が主体的に企画し、それを実践できるのも大きな魅力です。もちろん、選管の全面的なバックアップがあつて実現できるわけですが、自分たちが企画したことが実現すると自信になり、次の企画に繋げていこうというやる気になります。

上原 私の場合は、ひとえに植田会長の力です。明確な目標をもって行動していることに惹かれました。会長についていけば今までは違うものが見えるのではないかと思つたところが、続けている理由だと思えます。

また、青年リーダー養成研修などでさまざまな人と出会い、いろいろな意見を聞かせて

いただいたこともたいへん勉強になりました。吸収できることがいっぱいあるので、楽しんで活動しています。

島袋 皆さんからは重要な指摘がありました。まず、自分が必要とされていること、そして、仲間がいることです。自分たちの意見が反映されることも重要なポイントとして挙げられました。それから、リーダーの魅力も大きいということですね。

会場からもお話を聞きたいと思います。宮



岩元さん

崎市明るい選挙推進協議会常任委員の岩元真弓さん、活動を続けたいと思う理由についてお話しいただけますか。

岩元 私もゼミの教授に誘われて参加しました。最初は自信がなかったのですが、ヤングフォーラムや投票立会人、ラジオ番組出演などを経験させていただき、やりがいを感じています。活動を通じて自ら取り組むことの大切さに気づかされました。それが活動を続ける大きな要因になっていると思います。

投票率アップに向けて気づいたこと

島袋 皆さんの活動の目的のひとつは、若年層の投票率アップだと思います。そこで、投票率アップに向け、活動を通して気づいたことについてお話しください。

上原 啓発活動に携わる中で、個人的には